



吉田茂と現代の日本

要旨と余談

川面忠男

1 現代の日本において吉田茂の功罪を問う意味

A 憲法改正問題

安倍首相は、日本が主権国家になるためには憲法改正が必要と考えている。憲法学者のほとんどが自衛隊は違憲だとしている以上、憲法を改正すればよいというものだ。それは「戦後レジームからの脱却」だが、「戦後レジーム」を築いたのは吉田茂である。リベラル勢力は、吉田が日本を米国の従属国家にしたと批判している。安倍首相を擁護する勢力も吉田路線からの脱却が必要としており、この点では両勢力が共通している。

B 日本の国際政治学者の知見
高坂正堯（京都大学）は「論理的にあいまいな立場を貫いて経済中

心主義というユニークな生き方を根づかせた」などと吉田の国家運営を高く評価した。これが吉田像の通説になっている。

永井陽之介（東京工業大学）は「非核・軽武装・経済大国を築いた功労者」と評価。吉田ドクトリンは永遠としながら、吉田が本当にどう考えているかということと吉田ドクトリンは関係ないとしている。吉田の個人的な意図をこえ、吉田ドクトリンが戦後長く続いたことによつて「平和と繁栄」が可能になった。戦後の日本国民は憲法第9条と日米安保の矛盾する体制を受容した。高坂や永井の吉田擁護論をチェックしながら今後の議論を生産的にしたい。

2 吉田茂と敗戦国日本

A 外務大臣としての吉田茂

吉田は戦後の幣原内閣で外交権を失った外務大臣を務めたが、対占領軍との外交でマッカーサーとお互いが必要とする関係をつくった。マッカーサーの吉田に対する評価は高いものがあった。

後にマッカーサーが「日本人は12歳である」という発言をしたとして批判、反感を買ったが、吉田

は報道が簡単に意を伝えていないと擁護した。日本人の資質、日本の文化は優れているが、民主主義が未熟というのが真意だった。

B 外交的感覚

吉田は外交の勘を重視した。吉田にとつて憲法改正（象徴天皇制、戦争放棄）は降伏条件だった。

3 吉田茂と戦後日本の平和主義

A 憲法改正

日本の安全保障は国連に委ねる。日本が国連に加盟し、国連安保が機能するまでは、憲法改正によつて自衛隊を保持できる。

B 朝鮮戦争の影響

日本が戦争に直接関与しなくても戦争に巻き込まれるリスクが生じる。吉田は西村熊雄条約局長を信頼した。西村の見解は「国連安保は未だ機能していない。国連が乗り出してくるまでの間、自力で対応するが、非武装の日本は自力では対応できない。そこで日本は特定の国（アメリカ）と特別協定を結ぶ。特定国が日本を守る代わりに日本がその国に基地を提供する」というものだ。

4 サンフランシスコ体制

A 講和論争

南原繁東京大学総長が全面講和を主張したが、それは国際問題を知らないとして吉田茂は片面講和を結んでいくしかないと対立した。

B サンフランシスコ体制の形成

1951年、ソ連など除き49か国がサンフランシスコ講和条約に調印。台湾寄りの吉田書簡の自身は疑問である。米国寄り、議会向けのもので、後に中国に対する外交の自由度をせばめた。

日米安保条約は基地を自由に使える一方で日本防衛が明記されていない不平等なものとなった。この日安保は暫定であり、独立後に対等にするべきとされた。

5 吉田茂にとつての戦後の日本国家像

A 模範国IIイギリス

B 通称国家の外交地平

冷戦下、米国は中ソの直接侵略を警戒したが、吉田は日本国内における中ソと連携する勢力の内乱をおそれた。

1954年、英連邦国主導のロンボ・プランに加盟、通称国家地平の拡大を図った。

6 おわりに

吉田は敗戦時に「此敗戦必ずし

も悪しからず」と言った。日本は1920年代に着実に発展したが、1930年代に軍国主義に。敗戦後は開放的な自由主義国家としての持続的な本来の発展に結びついた。

また吉田は何がしか尊敬されるようにモラルを大事にする国家づくりを考えていた。また「先進君主国」の民主主義を考え、それを支えるのは政党政治だとした。

余談

講演後の質疑応答で、吉田茂の評判がわるかった話が出た。野党議員をバカ野郎呼ばわりして衆院解散に追い込まれたりカメラマンに水をかけたりする一方、天皇陛下には「臣吉田」とへりくだるなど庶民感覚には合わないといった素顔である。吉田の評判をわるくしたのは軽薄なマスコミだという聴講者の見解も披露されたが、井上先生は吉田の持つ権力志向を指摘し、これには納得するものがあった。井上先生は「吉田はサンフランシスコ講和条約が結ばれた時に辞めればよかった。権力にしがみついた。疑獄もありましたし…」

などと述べたのだ。吉田は、敗戦国日本が独立し、軽武装の経済国家として発展する道筋をつくったことで優れた国家指導者と評価できる。その一方で汚点も残している。それが先生の言う疑獄、つまり造船疑獄である。造船疑獄に關し私はメモを残している。

●海運業再建のため外航船舶建設資金の融資に際し国が市中金利との差額を補償する法案を成立する過程で海運業界から有田二郎自由党代議士らに贈賄の働きかけがあり、昭和29年1月に表面化。業界は佐藤栄作幹事長(後に首相)に1千万円を献金、検察は自由党という第3者への斡旋取賄になるとして逮捕許諾を請求しようとしたが、犬養健法相が指揮権を發動してつぶした。法相は辞任した。吉田首相は国会質問に応じなかったが、内閣辞職に追い込まれた。

●法相の指揮権發動が自由党・吉田内閣の意向に従ったのはいくまでもない。造船疑獄の主任検事は河井信太郎さんだったが、河井さんは10数年後の昭和41年に東京地検の次席検事になった。当時、私は日本経済新聞の社会部に所属、司法記者として毎日午前11時と午後5時に次席検事室での

記者会見に出た。会見と言っても毎日のことなので雑談が多かったが、その中で造船疑獄の話も聞いた。指揮権が發動された時は涙を流して悔しがったという。

戦後、数々の政治経済犯罪を捜査した河井さんならではの口癖があった。戦後の経済発展をもたらしたのは政治家や経営者が優秀だったからではないという。「優秀な官僚と技術者、勤勉な労働者がいたからだ」という見解である。

河井さんは私に「きみが政治記者になつたらつきあわないよ」と言ったが、幸か不幸か政治記者にはならず河井さんが退官して弁護士になった後も丸ビルの事務所を訪ねることができた。

河井さんの政治家不信もわかるが、日本の戦後の回復・発展は政治指導者、経営者、さらに官僚、労働者といった日本人がそれぞれ部署で頑張ったからだ。それは現代の日本にも求められている。

(元日本経済新聞記者)



随想

「吉田茂と現代の日本」と関連

Q & A を聴き思った事

虎長

演会・茶話会で感じた事を記す。

講和条約調印の時、僕は小学校高学年。「独立できてよかった」との感想は持ったが、吉田への好悪感はなかった。吉田政権最後の頃は中学生。造船疑獄での指揮権發動で、「吉田は怪しからん」と思った。その後約10年は、当時の日本の対米従属に不満を感じており、下地を作った吉田が亡くなったとき、「なんで国葬？」といぶかったものだ。だが、次第に、僕の吉田への評価は高くなっていった。自分が加齢で丸くなったためではない。その後の政権の多くが、吉田のような面従背反の対米姿勢でなく、本当の対米従属を続けたのに比べ、吉田は頑張った、と理解し始めたからである。

特に保守リベラルの影が薄くなった現代の日本では、吉田に学ぶ点が多いと思う。「吉田政権時代に、

東条内閣閣僚だった岸信介が政権担当するよりましだった」との井上先生のご指摘に同感である。「対米独立のための対米従属」というアンビバレンスに慣れてきた日本人にとっても、岸の血をひく安倍首相のやり方は、日本の利益になるとは思えない。「改憲のためには、「アメリカに押し付けられた」と現憲法批判の反米的、態度をとりながら、高価な武器をアメリカの言い値で買う対米隷属的態度をとる。日本は安全保障のためには、頑張る軍拡するより、食糧確保と教育に金を使うことが必要だろう。吉田が「行政協定」の改定に熱心でなかったとの井上先生のご指摘があったが、それを継承した「地位協定」を改定する努力は、過去のどの政権にも安倍政権にもない。

現在の安倍一強の状況は望ましくない。吉田は、対米交渉で「うるさい社会党がいるので」という口実を使ったし、「社会党に頑張ってもらわねば」とも発言。国葬時には勝間田社会党委員長も、吉田の戦後復興への貢献に賛辞を送っている。

「朝日・毎日」は『安倍政権は改憲へ国民を誘導するために着々と体制固めをしている』としているが、国民はそれほどバカではない」と井上先生はおっしゃった。同感である。だが、新聞論調がすべて産経・読売と同じになるのは怖い。今回の講演会後の茶話会で、「自分は『九条の会』で改憲阻止の署名運動をしている」と発言された方が男女一名ずつおられた。敬意を表したい。若・中年層の保守化・反動化を止める老人パワーも必要と思う。それによるバランスこそが、「国民の常識は、護憲と自衛隊容認というアイマイな態度をとり続けること」との井上先生の見方における「常識」に必要ではなからうかろうか。

(39 卒)

以上



4月講演予定の

出口治明先生のこと

松井和明

過去60年間、少ない週で3、4冊、多いときは10冊以上読み、現在まで一万冊以上読んだという稀代の読書家。好きな読書、世界70カ国・千二百以上の都市の旅、面白い人との邂逅で収集した情報を数字・ファクト（事実）・ロジック（論理）で考え抜いてこられた。

歴史が好きで、世界史の千冊以上を読破、各地の潮流が細部を含めて頭の中で整理・記憶されている。人類の歴史は世界史ひとつで日本史はないとの考えで、3度目の人類の千年史を執筆中。根底には将来何が起るかへのヒントは過去の歴史にしかないとの思いがある。

日本生命で戦略部門たる企画部門、業法改正等制度改革、ロンドン現法社長、国際業務部長など内外の中枢部門を歩むが、経営トップとの海外戦略判断の相違から退職。高齢者が生きる意味―経験と知恵

を次世代につなぐ―を実践、2008年「ライフネット生命」を創業。

同社は、生命保険料を半分にして安心して赤ちゃんを産み育てることのできる社会を創るというmission、マネーフレストとして行動指針、分かり易く手軽で便利な生命保険をcore valueとし、100年後に世界一の生命保険会社となるvisionを掲げ、奮闘している。

日本社会に対しては、これから30年の3つの構造的な政策課題として、①人口減少問題への対応―赤ちゃんを産みややすくする政策が要る、②生産性の向上（20年一人当たり生産性2.1位）―伸びる産業に人を、③財政再建の問題―中負担の社会へを指摘している。

本年初からAPU(立命館アジア太平洋大学)学長に就任、38カ国、全体の20%を超える3千人の留学生が溢れる食堂を見て「若者の国連」と直感。長期ビジョンも「ここで学んだ人が学んだことを活かし世界各地の持ち場で行動して世界を変えろ」と先生らしい。

(39 卒)

以上